



## 北海道に旅行して

中頭病院 内科  
小田口 尚幸

娘の中学受験が終わったらさっぼろ雪まつりにあわせて北海道旅行をしようと以前から決めていた。大雪で大変な思いをされている方も多いと思うが家族全員が南国育ちであり、雪には特別な思いがあった。3泊4日の日程であったが、その頃は北海道も含め日本は例年になく寒波に見舞われていた。日程が近づくにつれて天候は回復し無事出発できた。新千歳空港から電車に乗り札幌駅の地下道を通って外に出た。18時過ぎで暗く、道路はこおり、粉雪が降っていた。さっそく積もっている雪を触ると軽く羽毛のようであった。歩道脇の踏まれていない積雪の上を歩いてみると靴がずぼっと入ってしまう。雪玉を作ろうとしたがさらさらして作れない。ホテルまで200mほどであったが歩道脇の雪を見捨てがたく、なかなか着かなかった。2日目は滝野すずらん丘陵公園という札幌から地下鉄とバスを乗り継いで1時間半ほどの公園へ行った。公園といってもとても広くスキーやそりができ、特にチューブソリが人気のものであった。当然だが一面、きれいな真っ白でキュッキュッと雪を踏みしめながらしばらく歩いた。ソリといえば通常プラスチック製の子供が良く乗るソリを連想するが、チューブソリはその名前の通り30cmほどのチューブを円形にし、その中に尻をいれ滑るソリであった。チューブソリのコースは直線とS字があり、直線コースは5レーンほどあり200mほどであったと思う。上まではチューブソリに乗ったままワイヤーで引っ張られ快適であった。いよいよ滑ることになり尻をいれスタンバイする。前の方が滑り終わり歩き出したところで滑り始めた。あっという間であったがスピードは結構あり冷たい

風が気持ちよかった。2回ほど滑りS字へ移動した。S字は1コースしかなくしばらく順番を待った。順番が来て座ると後ろから押してくれる。これはやや恐怖を覚えるほど右へ左へ振られスピードもあった。これは3回滑った。来場者が多くチューブソリ待ちのアナウンスが数回あったのでここまでとしソリを返却した。娘の1つ上の息子はチューブソリをみて、女と子供が乗るものだというようなことをいい説得したが乗らずベンチに座っていた。帰る時刻になりバス停のほうへ歩くと歩道の脇にだれも足を踏み入れていない積雪があった。南国育ちの我々はばたばたと前から後ろからやわらかい雪の上に沈んだ。あるものはブーツが雪の中に入り抜けず片方置いてくるものもいた。雪まみれになった我々を周りの方々は信じられない眼で見ている。3日目は旭山動物園に行った。やはり電車とバスに乗り継いで11時のペンギンの散歩を見た。ペンギンはゆっくりしか来ない。スタッフがマイクを持って説明していた。説明は観客を沸かせ、笑わせ、期待を持たせる内容だった。やっとペンギンが来た。ただ目の前を通り過ぎるだけであるが他の動物園でよく見るペンギンよりも大型でまっすぐ前を見据えてちょぼちょぼと歩く姿はくっきりと記憶に残った。餌やりの時間（もぐもぐタイム）のスケジュールをチェックしあざらしを見た。氷の穴からでてきて飼育員を追い回していた。トラもホッキョクグマも同じような場所を飽きずに同じように行ったり来たりしていた。トラは尿をかけると聞いていたが尻を向けるとしっぽを上げ、あっという間に観客にスプレーのように尿をかけていた。我々とは離れたところでかけていたが、あれはよけられない。レッサーパンダは高いはしごの上で眠りぴくりともしなかつた。サル山ではこざるがけんか？じゃれ合い？をしていた。天気が良く雪が解け始めていた。観客は多く感じた。旭山動物園は入園料が安く、また中学生以下は無料である。交通費（電車とバス）と入園料のセットを札幌駅のみどりの窓口で買ったのだが大人2人、子供3人で2万円ほど

であった。十分楽しんだ後、旭川駅の特急に乗って席につくと同じ車両に今は南部の病院に転勤した元研修医がいた。おーと声をかけどうしたのと話し世間は狭いと思った。家族連れで来ており大きな荷物をしょっていた。札幌駅で別れ、ホテルに帰った。当初の予定通り夜に雪まつりを見に行った。雪まつりでは仮設の巨大なジャンプ台からスノーボードでジャンプしていた。自衛隊の巨大な雪像、後日崩れた雪ミク雪像を見た。屋台も多くありやきとりやラーメンを食べたが大変おいしかった。メーカーによる営業もありエアコンメーカーはガラス張りの部屋を暖房しフラダンサーを踊らしていた。会場が広すぎて引き返しコンビニに入ろうとした。入り口に2人の大柄な外国人が携帯電話で大声で話していた。携帯に耳をあてながら、オネガイシマースと声をかけられたが肩をすぼめ、腕を広げ、わからないというジェスチャーで返した。買い物をしコンビニを出たがその2人が後をつけてきた。家族によると横断歩道の手前で止まったとき英語で話しかけていたというのが英語はわからないので耳には入らなかった。ホテ

ルが見えたのでさっさと入り事なきを得た。

4日目は午後の便で帰るためあまり時間はなかったが近くの赤れんが庁舎（北海道庁旧本庁舎）を見学した。見たこともないほどの大きな楕円形二つの雪だるまがあり、屋根からつららが下がっていた。中にはいると天井は吹き抜けのように高くとびらは大きかった。昼は雪をみながら「とんかつまい泉」でとんかつを食べ空港へ向かった。途中JR南千歳駅で降り大きな荷物を引いてザックザックと千歳アウトレットモール・レラに行った。大きくはないがチューブソリで滑るところがあり娘たちは何回も滑った。息子は暖房のきいた部屋でスマートフォンをいじっていた。時間があまりなくシャトルバスに乗って空港へというとき娘二人がダンボール迷路から帰ってこない。走って探すが見つからず途方にくれたとき遠くに小さく見えた。幸い人が多くなく大声で名前を呼びバスに乗せた。家族に帰りの飛行機の中でどうだったと聞いたところよかったとの返事が聞け、また別の企画でがんばろうと思う次第であった。



# 随筆



## 新米クリニック経営者のドバイ診療記

－「ハラハラ・ドキドキ」から  
「ワクワク・ドキドキ」への転換点－

医療法人こころ満足会 形成外科 KC  
新城 憲（あらしろ けん）

20年余りの公務員医師生活に別れを告げ、2007年6月にクリニックをオープンしました。

開業後は、クリニック経営者として10余名の職員をまとめて一つの方向に導くことの難しさに、経験したことのない落胆とストレスを感じました。

そんな中、開業時の資金繰りからスタッフ養成まで一手にこなしたクリニックのマネージャーでもある妻は、2008年8月に中東、アラブ首長国連邦（UAE）のドバイに足を運んでいました。ちなみにUAEは7つの首長国からなり、ドバイはその中の一つの首長国です。リーマン・ショック前のドバイは、飛ぶ鳥を落とす勢いで、日系企業の進出も盛んでした。妻は、その時に企業進出を仲介する経営コンサルタントであるA氏に現地で会い、なんと私がドバイで診療するための情報収集を行っていたのです。帰国後、A氏との出会いと妻のビジョンを耳にして、新米経営者がハラハラ・ドキドキの毎日を送っているのに、経営的にも厳しい状態なのに、どうして“ドバイ”なのと正直思いました。

ただ、妻の先見の明に一目も二目も置く私は、まずはその話に乗ってみようと思い、A氏の指示に従いドバイの医師免許取得に向けて準備を始めました。A氏によれば、その時点では日本人で実際にドバイで医師として活動した人はいないとのことでした。日本の医師免許を有するものは、当地の医師免許証を得るための学力試験は免除されますが、その代わり膨大で煩雑な申請手続きと現地での面接試験が必要でした。申請書類は、履歴書、職務経歴書、推薦状、卒業証明書、医師免許証、医師会所属

証明書などをすべて英文でそろえ、さらに各種証明書は日本の外務省とUAE在日大使館の認証を要します。

紆余曲折を経て、2009年7月に初めてドバイを訪れ、面接試験に臨みました。面接官はUAE厚生省が指定した公立病院の形成外科医で英語でのやりとりで、私の形成外科医としての経歴と技量を問うものでしたが、あらかじめ用意した症例写真を見せながらスムーズに終えました。

一ヶ月後には無事合格したとの連絡を受けたものの、その際に得られた医師免許は、UAE全域の公立病院のみで有効であることが判明しました。公立病院だけとなれば、私が考えていた構想にはそぐわないため、今度はドバイ首長国の厚生省に申請書を出して面接を受けることになりました。

その後も幾多の課題をクリアして、2010年5月に今度はドバイ厚生省が指定した国立病院の形成外科医の面接を受け無事合格し、ドバイ全域（医療特区を除く）のあらゆる病院での勤務が可能になりました。その時に、事前にインターネットで調べて、面会の約束をとったドバイ在の美容外科クリニックを3軒訪問しました。幸運にもドバイで二つのクリニックを経営するB医師に出会い、彼が日本から来た、見ず知らずの私にドバイで診療する手順を具体的に提案してくれました。

ドバイで仕事をするための就労ビザを取得するためには、後見人となる雇用主の証明が必要ですが、B医師が快くその役目を引き受けてくれました。そして2011年4月に、晴れて医師免許証と就労ビザを得ることができたのです。

ここまでドバイで仕事を始めるまでの経過を紹介しましたが、なぜこれほど苦労してドバイなのか、について述べます。この計画を考えた当初は、オイルマネーで潤う中東のドバイで好きな手術を手がけてクリニックの経営にも貢献できればと、正直考えていました。しかし、現実がそれほど甘くないことは程なくわかりました。

途中、挫折しかけた意思を支えたのは、ドバイで苦勞して今の地位を築いたA氏が放った「やってみないとわからない」の一言であり、いろんな夢を持った人々を引きつけるドバイという土地にいるときの「ワクワク・ドキドキ」感でした。

この砂漠の地に、世界一のビル・ショッピングモール・港湾・人工島・噴水・人工スキー場などを創造し、さらに金融・流通・交通・観光・医療のハブとなって安定成長する国を創ろうとする人間の叡智と努力に訪問するたびに感動し、生きる力をもらいます。

「ハラハラ・ドキドキ」の新米経営者だった私が、「ワクワク・ドキドキ」の形成・美容外科医へと変わっていき、いつしかクリニックの経営もスタッフとの関係も良好な状態に向って行きました。その転換点が、ここドバイの地に降り立ったことであったのは間違いありません。

今、診療としては3回目、通算9回目のドバイ滞在中に、この文章を書きながら、その思いを強くしています。2012年3月20日記  
(なお、詳細については私のブログ、「<http://kcblog.ti-da.net/>」をご笑覧ください。)



ドバイクreekから望むドバイの夕陽、遠方に槍のように見えるビルが世界一高いビル、Burj Khalifaです。